

# 令和5年度 学校経営報告（学校評価報告書）

四條畷市立四條畷西中学校

校長 中村 真奈美

## 1 学校経営方針

昨年度末の総括会議では、PDCA サイクルや目標に対する振り返りを意識した資料が提示されており、その内容から、それぞれの分掌部会が思いを込めて取り組みを進め、一定の協力体制や成果があったように感じられる。しかし、下記「子どもたちの実態」のような現状からは、それぞれの取組みが十分深められていなかったり、教員によって温度差があったり、学校全体の組織的なものになっていなかったりする実情があったのではないと思われる。これらの課題をふまえ、学校教育目標「夢に向かって自ら学び、何事にも前向きに取り組む生徒」の育成をめざし、昨年度まで取り組んできたことを基盤とする、あるいはそれぞれの取組みの意義を明確にして結び付け、それを学校全体で共有し、改めて組織的に取り組むことで、各取組みをく生徒にとって意味のあるものにする必要がある。また、これまで成果が見えにくかったためか、学校の教育活動の中心である学力向上や授業改善についての方向性が、協同学習から非認知能力の育成に舵を切り、さまざまな取組みの意義が薄れそうな懸念が生じている。本校生徒の学習意欲・学力向上、ひいては自己肯定感の向上は大きな課題であり、これまでの授業改善と同じ方向で継続することが、結果として今年度重点をおいて取り組みたいと考えている非認知能力の育成につながることにについて担当者との共通理解を図り、学校全体を方向付ける必要がある。

他方、生徒指導提要进行をふまえた生徒指導に関する理解を深めることや、学習指導要領をふまえたキャリア教育の充実及びカリキュラムマネジメント、ICTの効果的な活用、併せて支援教育等の充実も図る必要があるが、これらも教員の負担感につながらないように、既存の取り組みを工夫・充実させることで、上記授業改善、学習意欲・学力向上に向かって結びつくようにしなければならない。そのために、担当教員とのコミュニケーションを密にして指導助言するとともに、研修や先進校からの学びも参考に、教員の気づきや新たなアイデアの発想を促す。PTAの活動や今年度から本格的に始まる学校運営協議会の協力を得て、FUD（補充学習）やクラブ活動等をはじめとして活動のイメージを具体化し、教員が実感できる形で業務改善を進めながら、「魅力ある学校」かつ「地域とともにある学校」づくりを進める。

## 2 めざす学校像、子ども像、教師像（中期目標）

★めざす学校像	<ul style="list-style-type: none"><li>・生徒一人ひとりの違いを認め合い、お互いが尊重し合う学校</li><li>・楽しく学び、確かな学力が身につく学校</li><li>・学習環境が整った美しい学校</li><li>・学校・家庭・地域が連携し教育力の向上をめざす学校</li></ul>
★めざす子ども像	<ul style="list-style-type: none"><li>・互いの良さや違いを認める人</li><li>・自分で考え意見を出す人</li><li>・失敗を恐れず行動する人</li></ul>
★めざす教師像	<ul style="list-style-type: none"><li>・課題を明確に把握し、常に情熱と使命感をもち、職務を遂行する教師</li><li>・豊かな人間性と社会性をもつ教師</li><li>・危機管理意識の高い教師</li><li>・互いに協力し、高め合う、指導の方向性が一致した、温かみあふれる教師集団</li></ul>

### 3 学校の現状（よさと課題）

#### （1）子どもたちの実態

令和4年度末の生徒アンケートには、学校に関して楽しいと感じているかを問うものが4項目ある。それらの肯定的回答は、「学校に行くのは楽しい」81.0%、「自分の学級は楽しい」90.0%、「西フェスなどの学校行事は楽しい」83.3%、「給食の時間は楽しい」78.6%であった。また、「みんなのために役立つことを心がけている」の肯定的回答は79.6%であり、人のために何かをしたり、人と一緒に何かをしたりすることを肯定的に受け止め、概ね学校生活を楽しんでいる様子が見られる。このことから、昨年度の「つながり かかわり」を重視したさまざまな取組みが一定の成果をあげていると考えられる。

一方、同アンケート「『自分がだめな人間だ』と思うことがある」60.3%、「夢や目標をもって学習に取り組んでいる」69.0%、「学校の授業以外に、1日あたりどれくらいの時間勉強をしますか」の30分未満38.9%に見られるように、自己肯定感が低く、学校・家庭にかかわらず、学ぶことに対する価値づけが弱い現状が見られる。また、「携帯電話をよく使う」91.0%のように、家庭でのルールや規則正しい生活等の意識にも課題があることが懸念される。

昨年度の大阪府チャレンジテストにおける授業者の分析からは、「記述式の無解答率が高い」「自分の考えを書いて表現することが苦手」等、違う学年・教科でも同じような結果の把握が見られた。生徒の上記のような意識は、学力調査においても挑戦する意欲にも影響していると考えられる。

#### （2）子どもたちを取り巻く環境

##### ①教育環境

今年度在籍する生徒のうち、校内資料で問題行動があり気にかけておくべきとして挙げられた生徒数は、3学年で108名であった。携帯電話の使用頻度の高さ（よく使う 91.0%）や、通塾率の低さ（まったく通っていない 43.3%）、就学援助率20%程度等の様子からも、経済的に厳しい家庭や、教育への関心が弱い家庭等、取り巻く環境が厳しい状態にあたり、精神的に不安定になってしまったりする要因がある家庭が少なくないと考えられる。

##### ②地域

昨年度立ち上げた学校運営協議会を、今年度どのように活用するかが課題であるが、各自治会長等は地域の学校に対して協力的である。

##### ③組織（教職員、PTA、保護者）

教職員は一定の協力体制ができており、組織的に物事を進める雰囲気がある。また、保護者と連携することに労を惜しまない姿勢も見られる。保護者もPTA活動に協力的であり、ボランティアとして活動している人数も数十名いる。

### 4 今年度の達成目標、具体的な方策

#### 目標設定区分1 『学校経営』

A 今年度の成果目標	達成基準（各種調査、アンケート等）
既存の取組みを工夫・充実させ、特色ある取組みとして価値づけし、魅力ある学校づくりを推進する。	保護者アンケート「学校は特色ある教育活動に取り組んでいる」の肯定的回答 現状：69.0% 目標：75% →R5年度末 69.3% 生徒アンケート「この学校には、他の学校にない特色がある」の肯定的回答 現状：69.3% 目標：75% →R5年度末 75.6%

B 目標実現に向けた取組み			
項目	達成基準	結果	評価
生徒アンケート「夢や目標をもって学習に取り組んでいる」の最肯定回答	現状：29.6% ※肯定的：69.0% 目標：40%	29.4% ※肯定的：70.8%	取組みはしているが、数値は改善していない。生徒の現状をふまえ、それに即した「夢や目標」をもたせるしかけについて検討する必要がある。
教職員アンケート「『夢ノート』の意義を理解して、活用を促していますか」の最肯定回答	現状：29.1% ※肯定的：74.4% 目標：50%	26.7% ※肯定的：63.4%	「夢ノート」に関する取組みを通して生徒にどんな力をつけたいのか、生徒の現状を踏まえた共通理解ができていないと考えられる。

### 目標設定区分2 『学校組織の運営』

A 今年度の成果目標	達成基準（各種調査、アンケート等）		
本校生徒の大きな課題である学習意欲・学力とともに、非認知能力を向上させることを全体の目標として、各部会が取組みの意義を結び付けて提案し、推進する。	教職員アンケート「学校運営の状況や課題を全教職員の間で共有し、学校として組織的に取り組んでいますか」の最肯定回答 現状：38.9% ※肯定的：93.9% 目標：50% →R5年度末 35.5% ※肯定的：93.6%		
B 目標実現に向けた取組み			
項目	達成基準	結果	評価
教職員アンケート①「指導者として授業をコーディネートし、生徒の発言からゴールに導くことができているか」と、②「授業において児童生徒自ら学級やグループで課題を設定し、その解決に向けて話し合い、まとめ、表現するなどの学習活動を取り入れていたか」の肯定的回答の差	①現状：87.1% ②現状：67.8% ①－②＝19.3% 目標：①－②＝15%	①87.3% ②74.2% ①－②＝13.1%	研究部が中心となった授業改善研修等での学びにより、めあての設定（ゴールのイメージの共有）や、そこに至るための活動の在り方について共通理解を図れたことが成果となっている。
教職員アンケート「学校の目標や重点課題に向けた取組みに積極的に参画している」の最肯定回答	現状：60% 目標：70%	29.6%	さまざまな取組みに対する教員の協力はあがあるが、数値の大幅な減少は、目標や重点課題についての発信が少なかったことが原因と考えられる。

### 目標設定区分3 『人の管理・育成』

A 今年度の成果目標	達成基準（各種調査、アンケート等）
------------	-------------------

それぞれのキャリアステージに応じて、一人ひとりの教員がさまざまな取組みを批判的・客観的に見て、課題を把握し改善案を生み出す力を育成するとともに、現在リーダーとなっている教員から、次を担う教員へのOJTを意識して取組を進め、次のリーダーを育成する。	教職員アンケート「生徒の姿や地域の現状等に関する調査や各種データに基づき、教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のPDCAサイクルを確立していますか」の最肯定回答 現状：38.9% ※肯定的：87.1% 目標：43% ➡ R5年度末 32.3% ※肯定的：74.2%
-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

B 目標実現に向けた取組み			
項目	達成基準	結果	評価
教職員アンケート「悩んだり困ったりしたときに相談できる同僚（管理職も含む）がいる」の最肯定回答	現状：45% ※肯定的：70% 目標：55%	37% ※肯定的 92.6%	最肯定は数値が下がっているが、90%以上が肯定的な回答であるので、改善傾向にあると考える。
教職員アンケート「職員会議や部会などの会議では積極的に発言している」の最肯定回答	現状：55% ※肯定的：85% 目標：65%	25.9% ※肯定的 55.5%	リーダー層からは他の教員からも意見を出してほしいとの促しがあるが、発言量は増えない。決定事項に納得できているか等、質を問うことも必要である。

### 目標設定区分4 『地域連携と渉外』

A 今年度の成果目標	達成基準（各種調査、アンケート等）
教員の負担軽減のため、PTAや学校運営協議会を積極的に活用することで、学校の教育活動に対し、地域の理解や協力を得るとともに、教員が地域とつながるしくみを確立する。また、多くの大人がかかわり、さまざまなモデルを見せたり、肯定的な声かけを得ることで、生徒の自己肯定感の向上や夢や目標をもつことにつながる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・新規アンケート</li> <li>・学校運営協議会の振り返り（年度末）</li> <li>・PTA実行委員会の振り返り（年度末）</li> </ul> ➡R5年度末 いずれも組織体制を確立し、次年度から運用できるようにしたことは成果だが、具体的な活用には至っていないものもある。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・学校運営協議会の組織体制を確立し、次年度から運用できるように整えた。</li> <li>・地域の方による昼休みの定期的な見守り活動を行った。</li> <li>・すこやかネットの組織体制を整理し、学校運営協議会と連携できるように方向づけた。</li> <li>・PTA任意加入周知の動きに伴い、PTAの活動内容を見直した。</li> </ul>

B 目標実現に向けた取組み			
項目	達成基準	結果	評価
教職員アンケート「授業や活動が、生徒の将来に繋がると生徒を感じるよ	現状：42.0% ※肯定的：96.7%	41.9% ※肯定的： 96.7%	昨年度と変わらない結果である。 教育活動で生徒の将来につながるものはないため、ここでいう「生徒の将来につながる」とい

うに取り組んでいますか」の最肯定回答	目標：50%		うことの内容を共通理解する必要がある。
生徒アンケート「自分にはよいところがあると思いますか」の肯定的回答	現状：72.0% 目標：80%	71.5%	昨年度と変わらない結果である。 教員がほめようとする意識は高かった（96.3%）が、生徒の自己肯定感の高まりにつながっていない。生徒にとってほめられる価値や達成感をもてる高めの目標設定を検討する必要がある。
生徒アンケート「将来の夢や目標をもっていますか」の肯定的回答	現状：65.9% 目標：70%	68.8%	若干改善したものの、「夢や目標」をもつことについて十分生徒に考えさせるしかけができていないことが課題である。

## 5 総合評価と次年度に向けて

取組みは昨年度末の総括をふまえて予定どおり実施されたが、アンケートの数値では現状維持がほとんどであった。その原因として、①本校生徒の課題や長所、また、それらをふまえてどんな力をつけて卒業させるのかという、本校の教育活動の立脚点が共有されないまま取組みが実施され、各教員の理解に温度差が生じ、生徒への発信が曖昧になったこと、②取組みを充実させるためのしかけ（例えば、「夢や目標をもちなさい」という発信ではなく、どうしたらそれをもてるのか、あるいは、それをもつことの価値を理解させる等）を充実させることで、教員と生徒が課題や価値を共有し、同じゴールをめざせるような部分が弱いのではないかと考える。

次年度は、上記の課題を改善するために、分掌部会を再編し、総合的な学習の時間の柱をキャリア教育に定め、特活とあわせて内容を整理し、取組みの目的を明確にする予定である。また、特活・総合の学習内容の決定が学年に任せられている部分について、学校として生徒の長所を伸ばし、課題を改善できるような内容を検討し、1年かけて取組みの価値や方向性を紐づけたい。さまざまな取組みが生徒と教員の達成感や充実感につながるよう、多様なアイデアを取り入れながら改善したいと考えている。